

2. 古墳を地域資源化する（3） —湯舟坂2号墳プロジェクトの2022年—

京都府立大学文学部考古学研究室

1. はじめに

京都府立大学文学部考古学研究室では2020年より京丹後市教育委員会・京丹後市久美浜町須田区などと共同で、湯舟坂2号墳およびその周辺に分布する古墳の学術的価値を明らかにするとともに、その成果を地域資源として活用するための様々な取り組みをおこなっている（諫早2021、京都府立大学文学部考古学研究室2022、吉永2022など）。今年度も令和4年度京都府立大学 ACTR「過疎化が進む地域における文化遺産の地域資源化に向けての実践的研究」（研究代表：諫早直人）の一環で、地元久美浜において第2回目となる京都府立大学 ACTR 成果報告会「地域資源としての湯舟坂2号墳Ⅱ—出土品研究の最前線—」を開催し、湯舟坂2号墳に先行する首長墳である須田平野古墳の測量調査を実施するなど（本書第I部第1章参照）、様々な活動を進めてきた。以下、今年度を中心とする取り組みについて紹介する。（諫早直人）

2. 須田平野古墳解説板の制作

須田平野古墳には、墳丘へと続く遊歩道が地元住民によって整備されており、その入り口には旧高龍中学校の生徒によって2005年に作成された案内板が設置されていたが、老朽化が進み文字の判読や自立が困難になっていた。その為、湯舟坂プロジェクトの一環で、地元在住のデザイナーである岸本卓也氏（素組アート）から多くの助言をいただきつつ、学生が主体となって解説板を制作した（写真1・2）。解説板には須田平野古墳の概要に加えて、湯舟坂プロジェクトの紹介や周辺の古墳マップなどもレイアウトした。解説板の内容を考えるだけでなく、2月19・20日には地元の方と一緒に設置作業をおこない、地域住民の意見や要望を直接聞くことができる貴重な機会となった。（松田篤）



写真1 解説板制作風景



写真2 設置した解説板



写真3 成果報告会の様子



写真4 写真パネル展の様子

3. ACTR 成果報告会とパネル展示解説

10月15日(土)に京丹後市役所久美浜庁舎において『地域資源としての湯舟坂2号墳Ⅱ—出土品研究の最前線—』と題し成果報告会を開催した(写真3)。当日は菱田哲郎による趣旨説明の後、環頭大刀が出土した1981年の発掘調査当時について新納泉氏(岡山大学名誉教授)による基調講演があり、続けて湯舟坂2号墳出土の貝装馬具の素材について黒住耐二氏(千葉県立中央博物館)、湯舟坂2号墳出土大刀・銅鏡の文化財科学調査について初村武寛氏・山口繁生氏(元興寺文化財研究所)、湯舟坂2号墳出土大刀について金字大氏(滋賀県立大学)より報告がなされた。最新の研究や技術を用いて湯舟坂2号墳に再びスポットを当てたことで、新たに明らかになった湯舟坂2号墳の実態が数多くあった。最後の塚本敏夫氏(元興寺文化財研究所)・諫早直人のもとでのディスカッションでは、発掘調査当時を知る新納氏がいたこともあり、活発な議論が繰り広げられた。当日は京丹後市民を中心に、全国各地から80名以上の来場があり、中には発掘調査当時をよく知る地元の方もいた。

会場内では前回同様に栗山雅夫氏(奈良文化財研究所)撮影の高精細写真を用いたパネル展示をおこなった(写真4)。学生で写真の選定をおこない、湯舟坂2号墳の出土遺物をはじめ、今年度新たに撮影された宮津市知恩寺所蔵の環頭大刀や京丹後市丹後町高山12号墳出土の環頭大刀、そして須田平野古墳の写真を展示した。また、学生有志が写真解説をおこない、来場者に湯舟坂2号墳の魅力を伝えるよい機会となった。

翌日10月16日(日)には、須田区主催の古墳祭に参加し、地元の高龍小学校生を対象に須田区のスポットをめぐるスタンプラリーやレクリエーションを企画していたが、残念ながら新型コロナウイルス感染症拡大により2年続けて中止となった。



写真5 古墳慰霊祭の様子

1982年以来続いている古墳慰霊祭は例年通り同日午前に開催され、今回も研究室として参加した。前回は悪天候のため寺院にてとりおこなわれたが、今回は晴天に恵まれ、金剛寺住職、川上教朗氏のもと、湯舟坂2号墳の前でおこなわれた(写真5)。(井川瑞季)

4. 成果報告会アンケートからみえる成果と課題

湯舟坂プロジェクトを進めるにあたって現状の成果と今後の課題を明確にするため、ACTR 成果報告会の来場者を対象にアンケートを実施した。アンケートは来場者の受け付け時に資料と共に配布し、回答者には返礼として次節で報告するグッズの一部をお渡しする形をとった。アンケート内容は昨年に続き、報告会の感想や湯舟坂2号墳関連のことがらに対する認知度、自由記述で今後の活動について意見を求めるものを中心に作成した。

アンケート結果（有効回答50名）は、再調査で明らかになった新知見や、湯舟坂2号墳に留まらず古墳時代の丹後全体への強い関心が窺われるものであった。丹後王国や記紀との関わりについても関心が寄せられ、報告会をきっかけに地域史への興味が深まったことは本報告会の成果の一つと言える。一方で、参加者の65%が京丹后市在住であったにも関わらず、須田区からの参加は3名と、昨年度（6名）よりも減少してしまったことは今後の大きな課題である。今年度は学生が湯舟坂2号墳の草刈りに参加するなど、より地域の方々と密に交流できる取り組みもおこなってきたが、より多くの須田区民に当プロジェクトへの関心を促すための情報発信については、さらなる工夫が必要であろう。今年度は須田区での全戸配布のアンケートはおこなっていないが、須田区民や須田区にある遺跡と、京都府立丹後郷土資料館に所蔵される遺物との物理的・心理的距離は依然として重要な課題の一つである。

もう一点の課題は、広報活動である。8割以上の方が報告会を知ったきっかけについてチラシと回答しており、目にする機会が多いのは各展示施設や公共機関を訪れる人々に限られる。来場者の年齢層や地域を広めるためにはSNSをはじめとする様々な媒体を通じたより積極的な広報活動が必要であろう。自由記述では古墳の場所がどこかわからない、簡易なリーフレットなど紙媒体の情報誌がほしい、若い世代を含めもっと多くの人に知ってほしい等、さらなる情報発信を望む声が散見された。

今回のアンケートでは、当プロジェクトの成果や将来性に期待する好意的な反応や、特に情報発信の重要性について貴重な意見をいただくことができた。アンケート結果は当プロジェクトの活動へのフィードバックとして、また湯舟坂2号墳をはじめとする須田区の文化遺産が抱える様々な課題を解決していく上での外部からの視点としても活用していきたい。（守田悠）

5. プロジェクトグッズの制作

本プロジェクトでは、湯舟坂2号墳などの再調査で得られたデータや知見をもとに、文化遺産を活かしたグッズ制作をおこなってきた。以下では今年度に本学生が主体となって制作したグッズについて紹介する（写真6）。

ポストカード 昨年に引き続き、栗山雅夫氏撮影の高精細写真を使用したポストカードを制作した。写真はACTR 成果報告会のトピックを考慮して、銅鏡、大刀、石室の3つを選択した。

古墳マップ 伯耆谷周辺の古墳を総覧できる「須田区古墳MAP」を制作した。先述の須田平野古墳解説板に掲載の地図をベースに改良したものだが、携帯可能なチラシとして作り直すことで須田区の文化遺産をより広く知ってもらうことができるだろう。

クリアファイル 栗山氏撮影の高精細写真と、金宇大氏作成の実測図を組み合わせた環頭大刀



写真6 プロジェクトグッズ集合（栗山雅夫氏撮影）

須田区にお住まいの皆様へ

湯舟坂2号墳発掘40周年を節目として、久美浜町須田区や京丹後市教育委員会と一緒に進めてきました「湯舟坂プロジェクト」。

これまで古墳や出土品、当時の調査を再評価し、それらを地域の文化資源とすることを目的として、調査・研究をおこなってきました。

今年はその一環で9月に須田公民館をお借りし、湯舟坂2号墳にほど近い須田平野古墳の墳丘測量調査と石室の発掘をおこなしました。

また、10月には昨年度に引き続き湯舟坂プロジェクトの成果報告会を実施し、私たち学生もそれに合わせて湯舟坂2号墳環頭大刀をデザインしたクリアファイルと、新しい絵葉書、須田区古墳MAPを制作しましたのでお贈りします。

湯舟坂2号墳も、その周辺の古墳も、まだまだ新しい発見に溢れています。これらの活動が、皆様のそばにある文化遺産の魅力を再発見するきっかけになれば幸いです。

少し早いですが、よいお年をお迎えください。

2022年11月20日

京都府立大学考古学研究室 学生一同



図1 地域住民に向けた手紙

クリアファイルを制作した。高精細写真、実測図いずれも本プロジェクトで新たにつくられたものであり、最新の成果物を前面に押し出して活用したインパクトのあるグッズとなった。

以上3つのグッズは、上述のACTR成果報告会でアンケート回答の返礼として配布した。また後日、須田区にも全戸配布するとともに、学生からの手紙を同封し、今年度の本プロジェクトの活動を紹介した。

ポロシャツ 9月におこなった須田平野古墳の測量調査にあわせ、オリジナルポロシャツを制作した。丹後の海をイメージしたロイヤルブルーのカラーに、背面には「湯舟坂」の文字と、丹後の海の波で表現された環頭大刀の龍が大きくプリントされている。完成したポロシャツは調査や成果報告会などの各イベントでプロジェクト関係者が着用し、本プロジェクトを象徴するユニフォームとなっている。

6. おわりに

本年は須田平野古墳解説板の設置や湯舟坂2号墳などの草刈りへの参加、さまざまなグッズ制作など、本プロジェクトの学生による活動が地域住民の目に触れる機会が多い1年となった。くわえて、今回は紹介できなかった地元小学校との交流など、学生が直接地域の中に入って活動する機会が増え、これまでもまして湯舟坂プロジェクトが地域に浸透したのではないだろうか。発掘から約40年の月日で再び埋もれてしまった地域の宝物を、改めて掘り返し、新しいかたちで地域へと返す作業を今後も地域住民とともに進めていきたい。（吉永健人）

参考文献

諫早直人 2021 「古墳を地域資源化する―湯舟坂2号墳プロジェクトの2020年―」『京都府立大学文学部歴史学科 フィールド調査集報』第7号 京都府立大学文学部歴史学科

京都府立大学文学部考古学研究室 2022 「古墳を地域資源化する（2）―湯舟坂2号墳プロジェクトの2021年―」『京都府立大学文学部歴史学科 フィールド調査集報』第8号 京都府立大学文学部歴史学科

吉永健人 2022 「湯舟坂2号墳を「作る」「伝える」―京都府立大学の文化遺産活用―」『地域資源としての湯舟坂2号墳Ⅱ―出土品研究の最前線―《発表資料集》』京都府立大学文学部考古学研究室

編集後記

フィールド集報は、刊行当初より Adobe 社の InDesign を利用して組版作業を手作りでおこなっている。InDesign の取り扱いは、歴史学科文化遺産学コースのうち、考古・建築・地理の実習メニューに含まれ、本書の一部については、そうした実習のなかで学生が組んだものとなっている。

今年度のフィールド調査においても、各地で多くの方からのご理解とご協力を賜った。ここに改めてお礼申し上げる。歴史や文化遺産にかかる調査は一人では決して成しえないということを、今後も常に意識するように努めたい。(う)

京都府立大学文学部歴史学科

フィールド調査集報 第9号

編集・発行 京都府立大学文学部歴史学科

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

発行日 2023年3月30日

印刷 株式会社 北斗プリント社

〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2
